

有栖山公園通信

其乃拾七

平成十九年八月十八日 (ニコニコマーケット72)

有栖山公園 (<http://www.aliceyama.jp/>)

有栖山 葡萄 (budou@aliceyama.jp)

有栖山公園は「かもすぞジャパン」を応援しています



2007年 とある夏の日 有栖山葡萄

はじめまして&おひさしぶり、本日は御立寄りいただきありがとうございます。
「有^{ありすやま}栖^{ぶどう}山 葡萄」と申します、しがない二次創作小説書き同人屋にございます。

さて今回は、なんと新刊が二冊。コミケ参加 10 回目記念とでも言うべき、快挙です。

まずは君望サークルとしての面目躍如。新作小説「君がかえるシアワセ」をお届けします。

「かえる」は、変える・帰る・替えるといろんな意味を含んでいるため平仮名になっています。さて、どんな意味なのか。それは作品を読んでものお楽しみ。ちなみに「買える」ではありません、念のため。白稜を舞台とした売春組織、その元締、涼宮遙の暗躍を描いた作品だったりもしません、残念ながら。

そしてもう一冊、初ジャンルとして overflow 原作の「SchoolDays」壮絶なエンディングの数々で話題を掻っ攫った話題作です。原作があまりにも色々やっているので、二次で弄るにはなかなか手強かったです。

しかしこの二次創作、コトノハサマへの愛が詰まった一冊です。以前このペーパーでワンシーンの短編を書いたところ非常に好評で、一冊に仕上げようと思いつち半年かけて書き上げた作品です。尺は短いですが、楽しんでいただければ幸いです。そして初めての試みとして、途中で分岐して二つのエンディングを書いてみました。読み終わったときどちらのエンドが良かったと思えたか、皆様の意見を聞いてみたいところです。

次回イベントは、ヤンデレオンリー「病み鍋 PARTY 2」に直接参加予定。SchoolDays の新作とオリジナルヤンデレ小説を用意できればと考えていますが、どうなりますことやら……

では、まだどこかでお会いしましょう。

お気に入りのカップに、琥珀色の液体を注ぐ。
液面からは柔らかな湯気が立ち上り、辺りにさわやかなベルガモットの香りがひろがってくる。パイロットグローブをしたまま、カップをつまみ口に運ぶ。
ふう、ため息をつくときとすつと目を閉じた。
「保温ポットに入れてあるのに、あなたの紅茶は香りも味も文句無しに美味しくていいわ」
目の前の相手に向かって微笑みかける。
画面に映る相手は、慌てた表情をして手をばたばたとさせている。口の動きは、なにやらただならぬ様子だ。
「ああ、そうか。さっき音声切ったんだっただわ」
何事もなかったかのように、左手にある通信回路のスイッチを指ではじき上げる。
「姉さまっ、優雅に紅茶なんて飲んでいるんですっ。だいたい操縦中に両手を離さないでくださいっ、それと音声も切らないでくださいっ」
回路が開いたノイズが聞こえた直後に、スピーカーから音の割れた怒鳴り声が響いた。肩をひそめ片手で耳を塞ぐと、もう一方の手は再びスイッチに指をかけ切ろうとする。
「だから切らないでくださいっ！」
はあと小さくため息をつき、指を離すと相手を見返す。
「まったく、軽い冗談じゃない。段々おやじさんに似てきて、小言が増えたわよ」
悪びれた風もなくさらりというと、手にしたカップの紅茶を飲み干し小さな鞆にしまいこんだ。
そして、慣れた手つきでスイッチを切り替えていく。
「大体自分の作った自動航行システムが不安なら、さっさと直しなさいよね」
パネルのランプが明滅し、手動操縦に切り替わった事を知らせる。

「何度もテストしていますから大丈夫です。しかし万が一ということも有りますから、もう少し慎重になってください」
画面の向こうで少し自慢げに自身の作品を評価すると、真顔で抗議してくる。あの子ってば、こんな性格だったかしら。などと考えているうちに、高度は手ごころなどまで上昇していた。
「わかったわ。それじゃちょっと慣らしてから帰るから、格納庫あけておいてね。ちなみに今日の晩御飯はなに？」
パネルに並ぶ計器に視線を流すと、彼女はふつと腹の底で息をした。
「了解。あと今夜はメンチカツです。戻られてから揚げるので、熱々ですよ。それではお気をつけて」
につこりと微笑みながら応答する。
衣はさつくり、中から透明な肉汁がたつぷりと流れ出るメンチカツ。魅力的な夕食のメニューだ。たつぷりとかけられたデミグラスソースも手製のはず。彼女の頭の中で以前食べたときの記憶がよみがえる。
彼の作る料理はなかなかのものだ。その辺りの町場の店なら、そう負けるものではない。それに機体の整備士としての腕も、亡くなった親父さんに負けず劣らず一流と認めている。彼女は満足げにうなづくとき、操縦桿を握る手に力をこめた。
青空を翔ける真っ白な機体。
菖蒲の花弁を思わせる優雅な機影。
尾翼には、菖蒲の文様が描かれている。
彼女の大事な商売道具であり、相棒であった。
こいつの機嫌が悪い日には、命を落とすことになりかねない。
「相変わらずいい整備ね」
彼女はつぶやくと、メインエンジンを最大出力にあげ機体をさらに上昇させ始めた。
座席に背中が張り付く感じ。身体を押しつぶされるような圧迫感に耐えながら、限界高度まで上がりつつける。エンジンの振動を感じる、機体の全てを感じ取る。
「蒼きウル (菖蒲屋)」 序章
原案・原作 山賀博之
二次創作 有栖山葡萄